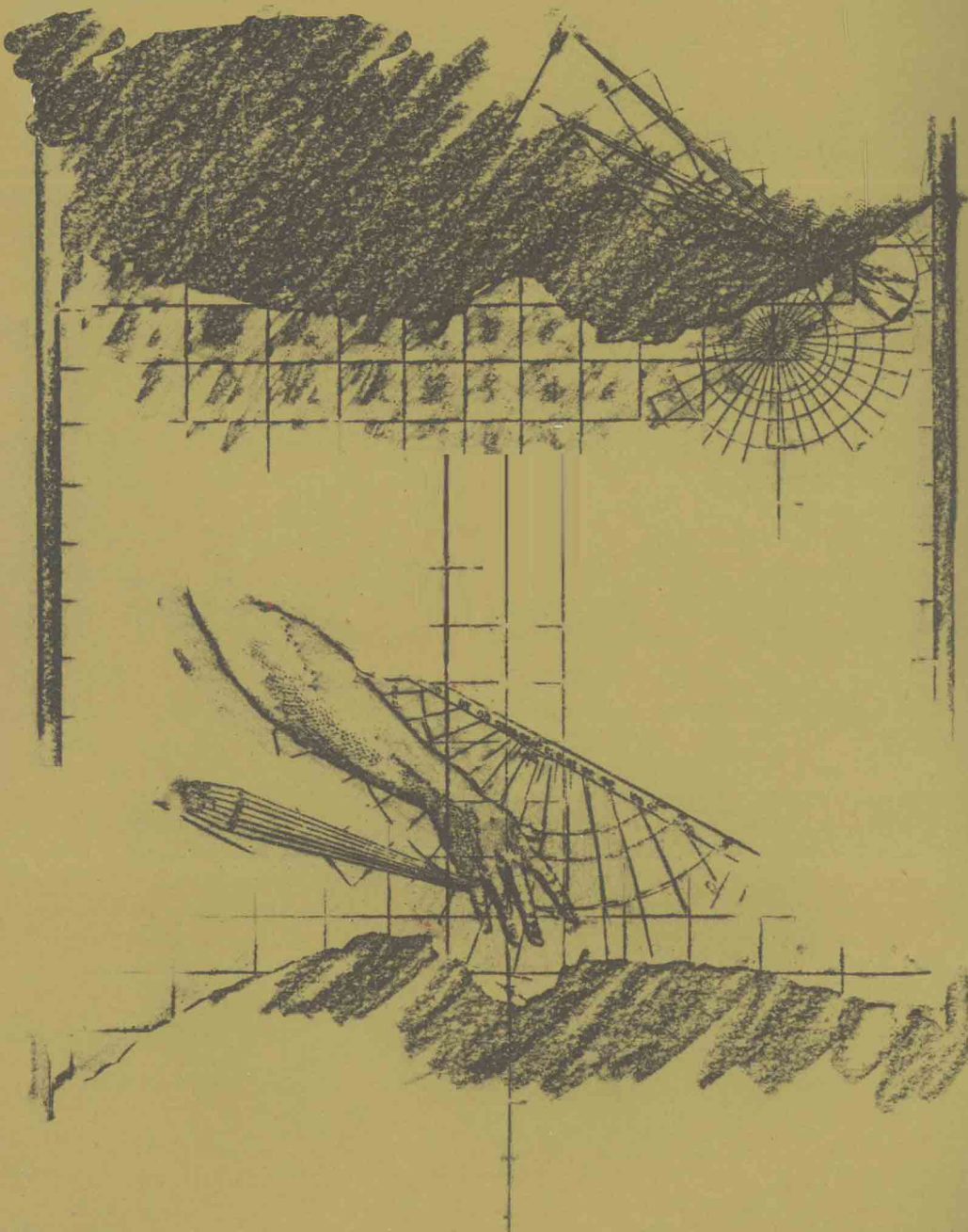


井上光晴

胸の木槌にしたがえ



中央公論社

胸の木槌にしたがえ

1973 ©

著者 井上光晴

装幀 加納光於

1973 年 11 月 20 日初版印刷

1973 年 11 月 30 日初版発行

発行者 高梨茂

印刷 精興社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 / 1

電話 561-5921(代)

振替 東京 34

定価 1200 円

検印廃止

胸の木槌にしたがえ

そこから小泊海岸までなだらかに起伏する赤黒い泥土を台地にして、彼の目差す団地は寄合うように建っていた。左端に蛇行するコンクリート溝の周辺にはまだブロックの建材が積まれており、掘返した斜面のあちこちに黄色い旗さえはためいている。それでもすでに幾家族かは移住をすませたらしく、ペランダに干された布団の下に、子供の三輪車や金網のようなものが見えた。

口石常雄は両足を交互にばたつかせながら、べちゃんこの踵にたまったズックの砂を払除けると、形さえまだ充分にはできていない道を真直ぐ歩きだした。昨夜から一睡もしていないので、やけにちかちかして眩しかったが、あまり眠気はなかった。道端の小石を拾って投げると、予期しないような固い音が返ってきた。きつと雑木林の幹にでも命中したのだろう。彼はひとかたまりの雑草を引抜き、いちばん丈の長い草を口にくわえて噛むと、残りを捨てた。煙草草という俗名の通り、青くさい匂いとからみあう西洋胡椒に似た風味がかすかに舌の先に漂う。彼は眼尻を拭いた手をかざして、突然光を影に変えた太陽を仰いだ。

昨夜、一晩中起きていたのは仲原の沼で蛙を釣っていたからである。蛙なら何でも食えるといだした油井仁の顔を立てるように、三人がかりでバケツにあふれるほどの沼蛙を獲りまくった

が、実際に食ってみるとあまりうまい代物ではなかった。

「唐揚げにするとうまかよ」みんなからラーメンと呼ばれている油井仁は弁解した。「焼いちゃどうにもならん」

「ぶしゃっというだけやからね」三俣吉郎みつまたよしろうはいった。彼はあまりラーメンを好いていないらしいのだが、どういう理由でか何時もびったりくっついていた。

「まあぬめぬめしとるが食べられんことはない」口石常雄はいった。彼は別のことを考えていたのだ。みんながそれに触れたがらず、何となく自分を大目にみるようになったのは、やはりその日が近づいてきたせいなのかもしれない。九月の第一土曜まできっかり数えて、あと二週間しかない。もう三ヵ月前、深夜の映画館で起ったちょとした事件をきっかけに、彼は本気でもなくその日に自殺することを宣言してしまったのだが、何時からか奇妙な負担を感じるようになっていた。

夜明けの近い空を顫わせながら、ずんぐりした鳥が木立の間を跳上るようにして飛んで行き、火焙りにした蛙の肢がじゅうっと音を立てた。

その夜、真夜中の十二時に開場し、満州を舞台にした日本の戦争映画を六時間ぶっ通しに上演するプログラムを組んだR市の映画館は、兩上りのためもある、異常な熱気とわけのわからぬ昂奮に被われていた。同級生の女生徒をめぐって、衣料問屋の店員を刺した中学生の噂が大きく揺れており、その上ビールの空罐に詰めた闇焼酎が大量に出廻っていたのだ。

そして事件は第一部の終了後、休憩時間に発生した。もう五十歳はとうに越えたと思われる瘦

身の男が、ふらふらとステージに立つと、呂律のまわらぬ口調で演説を始めたのである。こんな乱れた世の中に生きているのはつまらないからみんな死んだ方がいい、という趣旨のことを、男はくどくどと繰返した。思わぬ飛入りの余興に、最初げらげらと笑っていた観客は、一向に引退ろうとしないばかりか、こんな世の中にのんびんだらりと深夜映画にうつつを抜かすような奴は人間の屑だ、というふうな、棘のある言葉で挑発をつづける男に、ようやく苛立った。

そんなに自殺した方がましなら、そこでやってみろ、という野次が飛び、氣違い、いい加減でやめろという声がそれに重なった。すると男は「お前らの方がよっぽど氣違いじゃないか。此処におる者は全部、全部だ」と怒鳴り返したのだ。

幾人かの観客に引きずり下ろされた男の代りに、なぜ自分がそこに駈上ったのか、彼はしばらくぼかんとしていた。罵声とも嘲笑ともつかぬ声が辺りを取巻き、したたかに酔痴れた頭蓋の身を振廻すような氣分でわれに返った途端、口石常雄は男のいい分に賛成していたのだ。それならお前も自殺してみろ、という声に対して、おおやってやるぞ、といい放つまでいく時間も時間はいくらもなかったろう。九月の第一土曜という日をどうして持出したのかさえ、不分明なままに。

「やっぱり食用蛙じゃないと、それだけの味しかだしよらん」三俣吉郎はいった。

「食用蛙というても、この頃は普通の蛙やからね。食用にすればみんなそれは食用蛙になるとやから」

「そういうふうにならおかしかごとなるよ。食いさえすればみんな食用蛙というなら、特別にそんな名前はいらんごとなるやろう。そうやないか。赤蛙とか土蛙とかそんなふうに呼べばよ

かわけやろう。毒にはならんから食用というふうにはいかんよ」三俣吉郎は楯をついた。

「蛙はみんな食用になる。おれはそれをいうとるんやからね。そりゃ肉のついとるものはいくら味の違うかもしれないが、元々食えるんだから、どっちみち同じ。おれはそう思うね」

口石常雄は黙っていた。口の中がぬべつとしてきたぞ、というような言葉で割込んでもよかったが、急にわずらわしくなったのだ。

「明日、おれは小泊に行くつもりやけどね。……知つとるやろう。心中事件のあつた団地やから。……」それまで考えもしなかつた言葉が、彼の口からでた。

「新聞にでつたやつか」

「何しに行く。そんな所に」

「死に損うた奴に会いに行くとき。どんな顔しとるかいっぺん見とこうと思うてね」口石常雄はいつた。

「つまらんことを考えるね」油井仁はそういうと、瓦の上にのせた肢を小枝で突ついた。

「つまらんかね」口石常雄はいった。

「おもしろかことはなからう、そんな顔見ても……」油井仁はいった。

「おもしろいかおもしろうないか、みんな自分次第やからね。人にはわからんよ」三俣吉郎は指の先で口許を拭いた。

「そんなことをいえば、何も話はできんようになる」油井仁はいった。

「自分の考えとることが人にはわからんですまされるなら、言葉なんかいらんごとなるけんね。」

それはおもしろくないからつまらんというても、それは駄目とか間違いかいいうことにはならんやろう」

「駄目とか間違いと誰もいうとらんよ」

「そういうふういきこえたけどね」

「一応自殺志願者ということになつてからね、おれは」口石常雄は努めて軽い口調でいった。

「何事も研究が第一やからな」

「それでも激しゅうどまぐれたな。ちゅうどおれがお前んとこのお婆はんとやるようなもんやからね」油井仁は自殺志願者という言葉を通して。それでも、四十五にしちや、若う写つとつたな、新聞の写真は。……」

「若い時分のものをだしたとじゃないか。新聞はしゅちゅうさういうことをやりよるから」三俣吉郎はいった。

油井仁は一旦小枝に刺した蛙の肢を顔の前まで運んだが、ふたたび瓦に置いた。

「それでも、四十五と十七じゃ映画にもならんな」三俣吉郎はいった。

「生き残った奴は確か、窯場で働いとるとかいとつたな」油井仁は火種を掻き立てた。

小型ブルドーザーのステップに砂を盛上げること熱中している幼女と、傍にぼんやりと見守っている老人のかざす派手な色彩の日傘。口石常雄は一旦通り越した足を戻して、メモしてきた番号の所在をきいた。

「それは男の方。新聞はみんな間違えよつたんだ。死んだ方の女はFの三〇二。ろくすっぽ調べ

もせずつにまったくいい加減なことを書きよる」見掛けに似あわぬ張りのある声を老人はだした。
「水沢という家を訪ねとるんです。……」

彼がいい終らぬうちに、老人は汚ないものにもでも触れたように顔をしかめてそっぽを向いた。
「どっちの方角ですか」

老人が返事をしないので、彼は敷石だけ浮きだした感じの舗道を三十米ばかり小走りに駆けると、扇形の空地にぼっくり置き去りにされたような滑り台に上った。盆地のような地点から見渡すことは困難なので、いくらかでも高い場所にでてみようとしたのだ。しかしそこから見える二棟の建物にはアルファベットの文字も番号も記されておらず、附近にはまったく人の気配さえない。仕方なく彼は滑り台を下り、とにかくいちばん近くにみえる建物への上り口を探そうとした。すると、日傘をさしたさっきの老人が、息をはずませて近づいてきたのだ。

「水沢の家はそっじゃないよ。そっちにはまだ誰も人は入ってらん」

口石常雄は礼をいうと、老人が引返すのと連立って歩いた。

「こんなことをきいていいかどうかしらんが」老人はいった。「水沢清次みずさわせいじという青年と、あんたは知合いでもあるんかね」

「ええ」彼は嘘を吐いた。どんなふうな喋り方をしてても面倒なことになるのは目に見えている。

「清次という青年はおらんぞ、きつと。毎日朝早うから出て行きよるらしいからな」

「働きにでもとるんですか」

「働きじゃない。働きなぞでられるもんか」老人は断定するようにいった。

「そうか、そいじゃ無駄足だな」

「水沢清次に会いたければ、帰ってくる時間まで待つしかないな」

「何時頃帰るんですか」

「わからんね、それは」

くすっという声が洩れたような気がしたので、彼は首を廻した。しかし表情は動かず、白髪の不精髭にまみれた口からは別の言葉がでた。

「女たちの声がきこえる間は戻ってこれんやろう」

応じようもなく彼が黙っていると、それから一分位も経って、老人は凝った筋肉でもみほぐすように片方の手を肩にあてると、わざとらしく首を廻した。矢張り老人は内心笑っていたのだ。ブルドーザーのステップには、さっきよりも大きい砂の山が出来上っており、幼女はそれを小さい掌でばたばたと叩いていた。

「さよなら」

「水沢の家に行くのかね」

「ええ」

それっきり老人は見向きもせず、口石常雄は四つん匍いになって斜面を越えようと、土台だけ石垣を敷いた崖の下をくぐるようにし、ようやく見通しのきく土手沿いの道路にでた。

何処から迷ったのか、真直ぐ中央の広場に行きつこうとして、最も外れた団地の裏側にでしまったのだ。並んでゐる建物のどの棟かに存在するBの二〇四に向って、水沢清次の家を訪ねる

ことにあまり好ましい態度を示されなかったさっきの老人から逆に背中でも押されるように、彼の足は躊躇なく動いた。

左手下方にひろがる海面は幾分波立っており、戦時中、通信分遣隊のおかれていたという岬を前景にして、中型貨物船と漁船の行き交うのが見える。そういえば今年はまだ一度も泳いでいない、と彼は思った。きつとあの馬鹿げた予告に縛りつけられたせいなのだ。

口石常雄は自分の気持にはっきりした輪郭を与えたことに満足し、今夜、仲間を前にして一言葉をあれこれと探し始めた。折角期待して貰うとったのにすまん。……なんか馬鹿臭うなっただんで余興は中止。また会う日まで、じゃなかった、また死ぬ日まで。……ああしんど臭い。この際はっきりいうときますけどね、おれのお陀仏に賭けとる奴は馬鹿みまずぜ。……自殺なんかするつもりはないからね、いうとくぞ。

考えだすと、どれもこれも宙に浮いてしまい、どうしてもかっこうがつかない。それをきいた瞬間、誰彼の口許を歪める嘲りを想像すると、口石常雄の胸にはまたしても落着かぬあせりに似た感情が走った。

間道へでも抜けでたように路肩注意という立札のでた個所から、突然舗装された道路がふくれ上り、それをしばらく右下りに迂回すると、彼は団地にきて初めて二人連れの女に出会った。二人とも揃ってあつらえたような白いサンダルを履いており、着ているワンピースや日傘よりも足の方が先に目につくという具合であった。

「Bの二〇四は何処ですか、教えて下さい」

「Bの二〇四……」瘦せた方の女が番号を口の中で呟くと、「あらあ」という声をあげた。「それはあんだ、水沢さんのところじゃないね」

「そうです」彼はいった。

「あんだ、この人、水沢さんのところを尋ねよらすんよ」

「きいたよ、いま」もうひとりの女は彼の頭から爪先まで滑るような視線を走らせた。

「B棟というのはどの辺ですか」

瘦せた女が一度頭上まで差上げた日傘の柄を危く落しそうになり、倒しながら持ち変えた。

「B棟はあそこやけど、清次という人を訪ねるのなら、今はおりなさらんよ」もうひとりの女も日傘をかかげて、三列に並んだ中央の建物を指差した。

口石常雄は女たちの見開いた眼ざしを背中一杯に感じながら、おれはきっと面かぶりのおっちょこちよいなのだろうと思った。上っ面のところで、芝居がかった行動しかできないのだ。彼はなるべくゆっくりした足どりで、しかし、とてつもなく動悸を打つ胸を抱えて見た目よりも長い坂道を歩いた。そして気がつくと、水沢と鉛筆で書かれた表札の前に立っていた。

プザーを押した途端、びっくりするような明るい声が出て、真白に顔を塗った女がドアの陰に顔をだした。

「何のご用」

「水沢清次さんいますか」

「清次はいませんよ」

「仕様がないな、それじゃ……」きいた通りなので、彼はあまりがっかりもしなかった。

「清次を訪ねてくるなんて、珍しか人ね」

「水を一杯飲ませて下さい。この団地は坂の上に建つとるからひどう咽喉が渴いて……」彼はきつかけを求めるようにいった。祭か舞台でなければ見られぬような濃い化粧は何を意味するのか。「お入り」女はドアをさらに開いた。

予期しない事実に恵まれたような感じで、口石常雄は殆ど家具のない部屋に立った。

「そこに椅子があるでしょう」女は背後の丸椅子を指差した。「冷蔵庫がないから氷はないんよ」彼は差出されたコップの生ぬるくて少し塩気を含む水を飲んだ。すると女は畳を敷いた小部屋から自分も丸椅子を持出して坐り、「清次も惜しいことをしたものね。友達がくるとわかっていたら出掛けずにもよかったのに」といった。

「仕事ですか」彼はいつてみた。

「海の何処かにおるんよ」女は答えた。「あの子は、海さえ見とれば、それで気がすむとだから」「海が好きなら、この団地はほんとによかところにあるね」

「此処は嫌らしいところよ。いくら海に近くても、住んどの人間は猫ばかりだから」女はそういうと、ついと立上って畳部屋の窓際に身を擦寄せた。「みなさい、もう集ってきた」

B棟とC棟の間に横たわる帯のような空地の日蔭に立っている女たちを口石常雄は訝しそうに見た。子供まで数えると、およそ二十人余りになるうか。いちばん隅にかたまっている者の中には明らかに先程の女がまじっており、その前にしゃがんでいるのは老婆だ。そして両の眼のすべ

てが彼のいる部屋に向っているのである。

「見たでしよう。あれよ」女は顎をしゃくった。「これだからろくに窓も開けられないんよ」

異様な蒸暑さの原因はそうだったのかと思ひながら、彼はなおも窓の外を見つめた。水沢清次にまつわる事件のせいにしても、露骨すぎるような人々の蠢く顔。

「何時もああんですか」

「清次がおる時はね。でも今はあんたがきとるからでしよう」

「おれが……」彼は口ごもった。「どうしておれがきたから……」

「何か起りはせんか。起ればいい。みんなは何時もそう願うとるんよ。あたしとあんたが清次みたいなことになればいいと、そう思うとるんでしょう。きつと」

激しいことを簡単にいう女のやや薄目の唇には、白い化粧に見合うような赤い紅が山型に塗られている。事件のことに触れたがらないのではなく、女の神経はもっと先の方を走っているようであった。

「迷惑だな、そいじゃ」彼はいった。

「あたしのことは構わないんよ。どっちみちいろんなことをいわれとるんだから」

「窓を開けといた方がよくはないですか」

「駄目。それは駄目よ」女はきっぱりといった。

彼はふたたび窓際に近寄り、自分の場所を定めようとするかのように、老婆の後をゆっくり横切る男を見た。ブルドーザーの附近で幼児と遊んでいた老人よりも幾分若く、登山帽をかぶって

いる。

「またきた」彼はいうと、壁に顔をくっつけたままの姿勢でつづけた。「いうとくけど、おれは清次とかいう人の友達でも何でもなかとやからね」

女はちらと彼をみると、間を置いて「それじゃ何しにきたんね」といった。

「何しにきたんかね、ほんとに」口石常雄はいった。「自分でもようわからんよ」

しばらく言葉のない時間が流れ、彼はもう帰らなくてはなるまいと思った。すると、女が前よりも生き生きとした口調で喋り出したのだ。

「清次はね、あたしの子供じゃないんよ。ほんと姉が中学を終わったばかりの時に生んだ子供なんよ。姉はすぐ死んだし、親たちは生れた赤ん坊の顔もみとうないような気持だったから、それであたしが何もかも世話をみらねばならんようになったわけね。自分の娘が生んだ赤ん坊をどうしてあんなふうに邪険にするのか、今でもわからんけど、考えてみると、親たちはまだ若かったし、娘の子供とあまり年の違わない自分の生んだ子供がおったとだから、何か嫌でたまらんようになったでしょう。……そんなふうだから。あたしはまだ中学にも上らんうちから、清次を自分の生んだ子供みたいに扱わねばならんようになったんよ。本気でそう人からいわれたこともあるんだから。あたしが中学二年の時、うちの風呂場を修繕することになって、あたしはあの子を銭湯に連れて行ったことがあるんよ。そしたら流し場のところであたしをじろじろ見とった年寄の女が、随分若いおかあさんね、と軽蔑するみたいな口ぶりでいうんよね。あたしの子供じゃないって、そっくり返してやればよかったんだけど、何かものをいう気にもならなかったんで